

## 博士論文(要約)

論文題目 朝鮮語〈n挿入〉攷 —音韻論と形態論—

氏 名 辻野 裕紀

## 目次

1. はじめに.....	1
2. 〈n 挿入〉とは何か.....	2
2.1. 〈終声の初声化〉と〈n 挿入〉.....	2
2.2. 〈n 挿入〉の表記法をめぐって.....	4
3. 先行研究の概観と考察.....	6
3.1. 〈n 挿入〉は本当に「挿入」か.....	6
3.2. 〈n 挿入〉は共時的に生産的な現象か.....	7
3.3. 〈n 挿入〉はいかなる条件で起きるか:形態論的条件と語種論的条件.....	7
3.3.1. 形態論的条件.....	8
3.3.2. 語種論的条件.....	11
3.4. 〈n 挿入〉はなぜ起きるか:〈n 挿入〉の契機論.....	13
3.4.1. 音論的な契機.....	13
3.4.2. 形態論的な契機.....	13
3.5. 〈n 挿入〉はいかにして生じるようになったか:〈n 挿入〉の発生論.....	14
3.6. 〈n 挿入〉の実現実態はどのようになっているか:実態調査と社会言語学的考察.....	15
3.6.1. ソウル方言における〈n 挿入〉の実態調査.....	15
3.6.2. ソウル方言における〈n 挿入〉と話者の属性.....	20
3.6.3. ソウル方言以外を対象とした〈n 挿入〉研究.....	21
3.7. 〈n 挿入〉と사이시옷の関係.....	22
4. 〈n 挿入〉が起きる形態論的条件.....	24
4.1. 形態素の「自立性」とは何か:自立度の階層性.....	24
4.1.1. 自由形式と拘束形式.....	24
4.1.2. 附属語と附属形式.....	25
4.2. 補助詞요の自立性をめぐって.....	29
4.2.1. 結合要素の非選択性(原則Ⅰ).....	29
4.2.2. 分離性(原則Ⅱ).....	30
4.2.3. 交換可能性(原則Ⅲ).....	31
4.2.4. まとめ:補助詞요の自立性.....	32
4.2.5. 요の異形態/요~이요/ について.....	32
4.3. 漢字語接尾辞の自立性をめぐって.....	34
4.4. まとめ(4章).....	36
5. 〈n 挿入〉はなぜ起きるか:発生論と機能論.....	38
5.1. 〈n 挿入〉の発生論.....	39
5.2. 〈n 挿入〉の機能論.....	40

5.3. まとめ(5章) .....	43
6. 〈n挿入〉の実態調査:若年層ソウル方言話者を対象に .....	44
6.1. 固有語 .....	45
6.1.1. 固有語合成語 .....	45
6.1.2. 固有語疊語 .....	60
6.1.3. 固有語単語+(으)요 .....	62
6.2. 漢字語 .....	63
6.2.1. 漢字語合成語 .....	63
6.2.2. 漢字語合成語に準ずるもの .....	80
6.3. 外来語 .....	91
6.4. 混種語 .....	93
6.4.1. 漢字語+固有語 .....	93
6.4.2. 外来語+固有語 .....	97
6.4.3. 固有語+漢字語 .....	98
6.4.4. 外来語+漢字語 .....	101
6.4.5. 固有語+外来語 .....	102
6.4.6. 漢字語+外来語 .....	103
6.5. 句 .....	106
6.5.1. 冠形語+体言 .....	106
6.5.2. 体言+体言 .....	112
6.5.3. 副詞語+用言 .....	114
6.5.4. 絶対格主語+用言 .....	116
6.5.5. 絶対格目的語+用言 .....	118
6.5.6. 対格目的語+用言 .....	120
6.5.7. 主題目的語+用言 .....	121
6.6. まとめ(6章) .....	121
7. おわりに .....	125
参考文献 .....	128
調査語句項目 .....	135
謝辞 .....	165

## 本文

拙書『形と形が出合うとき:現代韓国語の形態音韻論的研究』(辻野裕紀著,九州大学出版会,2021年12月刊行,ISBN 978-4-7985-0315-8)に,博士論文の内容が含まれているため,全文公開が不可能である.

## 参考文献

### (1) 朝鮮語文獻

- 강옥미(2003)『한국어음운론』, 서울:태학사.
- 고광모(1991)「ㄴ첨가와 사이시옷에 관하여」, 『언어연구』3, 서울:서울대학교 언어학과.
- 고광모(1992)「ㄴ첨가와 사이시옷에 대한 연구」, 『언어학』14, 서울:한국언어학회.
- 고영근(1989)『국어형태론연구』, 서울:서울대학교출판부.
- 국경아·김주원·이호영(2005)「선호도 조사를 통한 ㄴ첨가 현상의 실현 양상 연구」, 『말소리』53, 서울:대한 음성학회.
- 국립국어연구원(1997)『서울 토박이말 자료집(Ⅰ)』, 최혜원(담당 연구원), 서울:국립국어연구원.
- 국립국어연구원(1999)『표준국어대사전』, 서울:두산동아.
- 국립국어연구원(2002)『표준 발음 실태 조사』, 최혜원(연구 책임), 권미영·황연신(공동 연구), 서울:국립국어연구원.
- 국립국어연구원(2003)『표준 발음 실태 조사Ⅱ』, 김선철(연구 책임), 권미영·황연신(공동 연구), 서울:국립국어연구원.
- 기세관(1990)『국어 단어형성에서의 /ㄹ/ 탈락과 /ㄴ/ 첨가에 대한 음운론적 연구』, 원광대학교 대학원 박사박위논문.
- 기세관(1991)「첨가음 /ㄴ/의 기능」, 『어문논총』12·13, 광주:전남대학교.
- 기세관(1999)「첨가음 ‘ㄴ’의 성격」, 『선청어문』27, 서울:서울대학교 국어교육과.
- 김선철(2006)『중앙어의 음운론적 변이양상』, 서울:경진문화사.
- 김성규·정승철(2005)『소리와 발음』, 서울:한국방송통신대학교출판부.
- 김승호(1992)「콧소리 덧나기」, 『국어국문학』11, 부산:동아대학교.
- 김옥영(2008)「ㄴ-첨가 현상의 제약:강릉 지역어를 대상으로」, 『음성·음운·형태론 연구』14-1, 대구:한국음운론학회.
- 김유범·박선우·안병섭·이봉원(2002)「‘ㄴ’삽입 현상의 연구사적 검토」, 『어문논집』46, 서울:민족어문학회.
- 김정수(1989)「한말[韓語]의 사잇소리 따위의 문법 기능」, 『한글』206, 서울:한글학회.
- 김정우(1994)『음운 현상과 비음운론적 정보에 관한 연구』, 서울대학교 대학원 박사학위논문.
- 김정우(1998)「/ㄴ/삽입 현상의 형태론과 음운론」, 『방언학과 국어학 청암 김영태 박사 회갑기념논문집』, 서울:태학사.
- 김차균(1981)「음절이론과 국어의 음운규칙」, 『논문집』8-1, 대전:충남대학교 인문과학연구소.
- 김차균(1984)「현대 국어의 사이시」, 『언어학』7, 서울:한국언어학회.

- 남기심·고영근(1985;1993)『표준국어문법론 개정판』, 서울:탑출판사.
- 남윤진(2000)『현대국어의 조사에 대한 계량언어학적 연구』, 서울:태학사.
- 배주채(1996;2011)『국어음운론 개설』, 성남:신구문화사.
- 배주채(2003)『한국어의 발음』, 서울:삼경문화사.
- 서보월(1983)「경계의 음운론적 기능」, 『안동대학 논문집』5, 안동:안동대학.
- 서보월(1990)「ㄴ첨가에 대하여」, 『어문논총』24, 대구:경북어문학회.
- 서울대학교 언어교육원(2009)『외국인을 위한 한국어 발음 47 ②』, 서울:랭기지플러스.
- 서정수(1980;1982)「문장의 구조」, 전재호·박병채 외『신국어학개론』, 서울:형설출판사.
- 성낙수(1987a)「이른바 ‘ㄴ뺏나기’에 대하여」, 『한국어학과 알타이어학』, 대구:효성여대출판부.
- 성낙수(1987b)「이른바 한국어의 두음법칙 연구」, 『한글』197, 서울:한글학회.
- 성낙수(1995)「구개음화되는 /n/의 표기에 대하여」, 『동방학지』89·90, 서울:연세대학교국학연구원.
- 송철의(1993)「언어 변화와 언어의 화석」, 『국어사 자료와 국어학의 연구 (안병희 선생 회갑기념논총)』, 서울:문학과지성사.
- 신지영·차재은(2003;2004)『우리말 소리의 체계』, 서울:한국문화사.
- 안병희(1968)「중세국어의 속격어미 ‘-스’에 대하여」, 『이승녕박사송수기념논총』, 서울:을유문화사.
- 엄태수(1995)「복합어의 음운현상과 최적이론」, 『어문연구』88, 서울:한국어문교육연구회.
- 엄태수(2010)「ㄴ첨가에 대한 표준어 규정의 연구」, 『국제어문』50, 서울:국제어문학회.
- 연세대학교 언어정보개발연구원(1998)『연세 한국어사전』, 서울:두산동아.
- 오미라(2006)「ㄴ-삽입 환경의 재검토」, 『언어학』14-3, 논산:대한언어학회.
- 오세내(2006)『현대국어의 형태음운론적 변이 현상에 대한 사회언어학적 연구』, 고려대학교 대학원 박사학위논문.
- 유필재(2006)『서울방언의 음운론』, 서울:월인.
- 이경희(1997)「현행 북한의 맞춤법 규정에 대하여 —남북한의 차이점을 중심으로」, 김민수편저『김정일 시대의 북한언어』, 서울:태학사.
- 이기문(1998;2005)『신정판 국어사개설』, 서울:태학사.
- 이기문·김진우·이상억(1984;2000)『증보판 국어음운론』, 서울:학연사.
- 이익섭(1968)「한자어 조어법의 유형」, 『이승녕박사 송수기념논총』, 서울:을유문화사.
- 이익섭(2005)『한국어 문법』, 서울:서울대학교출판문화원.

- 이토 히데토[伊藤英人](2009)「유형론 및 언어접촉의 관점에서 본 한국어와 일본어 —일본어 화자 대상 한국어교육의 입장에서—」, 伊藤智ゆき編『朝鮮語史研究』, 東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 임흥빈(1981)「사이시옷 문제의 해결을 위하여」, 『국어학』10, 서울:국어학회.
- 임흥빈(1998)『국어 문법의 심층 2 —명사구와 조사구의 문법—』, 서울:태학사.
- 전철웅(1990)「사이 시옷」, 서울대학교 대학원 국어연구회편『국어연구 어디까지 왔나 —주제별 국어학 연구사—』, 서울:동아출판사.
- 정인호(2010)「ㄴ첨가 관련 현상의 방언 비교」, 『방언학』10, 광주:한국방언학회.
- 최정순(1986)『국어 음운규칙의 단계적 적용에 대하여 —탈락과 삽입을 중심으로—』, 서강대학교 대학원 석사학위논문.
- 최정순(1995)『국어 통사음운론 연구』, 서강대학교 대학원 박사학위논문.
- 최현배(1929;1971)『우리말본』, 서울:정음사.
- 한국어교육개발연구원(2010)『아름다운 한국어 I -1』, 서울:아름다운 한국어학교.
- 허웅(1965)『국어음운학』, 서울:정음사.
- 허웅(1983)『국어학』, 서울:샘문화사.
- 홍운표(1994)『근대 국어 연구(Ⅰ)』, 서울:태학사.

## (2) 日本語文献

- 天羽均・佐々木康之・西川長夫・松本勤(2002)『初級フランス語文法』, 東京:朝日出版社.
- 五十嵐孔一(2011)『『우리말본』의「말소리갈」について』, 『朝鮮學報』220, 天理:朝鮮学会.
- 伊藤英人(2005)「韓国語とその周辺の言語 —何が似ていて, 何が違うか—」, 『2005年度韓国語教師研修会講義要旨』, 東京:国際文化フォーラム.
- 内山政春(2012)「朝鮮語のいわゆる「ていねいさをあらわす-요」について」, 『朝鮮語教育 —理論と実践—』7, 福岡:朝鮮語教育研究会.
- 梅田博之(2012)「韓国語の丁寧さを表わす終助詞요についての覚え書」, 『言語と文明』10, 千葉:麗澤大学大学院言語教育研究科.
- 上野善道(2008)「母は昔はパパだった, の言語学」, 大津由紀雄編『ことばの宇宙への旅立ち —10代からの言語学』, 東京:ひつじ書房.
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室編(1986)『朝鮮語大辞典 下巻』, 東京:角川書店.
- 大島弘子・中島晶子・ブラン, ラウル編(2010)『漢語の言語学』, 東京:くろしお出版.
- 小川晋史(2010)「日本語の諸方言における二字漢語のアクセント —単純語と複合語の狭間で—」, 大島弘子・中島晶子・ブラン, ラウル編(2010)所収.
- 奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』, 東京:むぎ書房.
- 影山太郎(1989)「形態論・語形成論」, 崎山理編『講座日本語と日本語教育 第11巻 言語学要説(上)』, 東京:明治書院.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』, 東京:ひつじ書房.

- 影山太郎(2010)「日本語形態論における漢語の特異性」, 大島弘子・中島晶子・ブラン, ラウル編(2010)所収.
- 風間伸次郎(2003)「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク, モンゴル, ツングース), 及び朝鮮語, 日本語の文法は本当に似ているのか —対照文法の試み—」, アレキサンダー, ボビン・長田俊樹共編『日本語系統論の現在』, 京都:国際日本文化研究センター.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 東京:三省堂.
- 川口裕司(1992)「言語記号としての複合名詞」, 『人文論集』43-2, 静岡:静岡大学人文学部.
- 菅野裕臣(1965)「現代朝鮮語のリエゾンについて」, 『朝鮮学報』36, 天理:朝鮮学会.
- 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』, 東京:白水社.
- 菅野裕臣(1988)「朝鮮語の構造について —その膠着的特徴と関連して—」, 『学習院大学言語共同研究所紀要』11, 東京:学習院大学言語共同研究所.
- 菅野裕臣(2006a)「朝鮮語の音と文字」, 『韓国語学年報』2, 千葉:神田外語大学 韓国語学会.
- 菅野裕臣(2006b)「朝鮮語の形態論的単位について」, 『韓国語学年報』2, 千葉:神田外語大学 韓国語学会.
- 菅野裕臣(2007)「文字, 音, 正書法」, 『韓国語学年報』3, 千葉:神田外語大学 韓国語学会.
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編(1988;1991)『コスモス朝和辞典 第2版』, 金周源・徐尚揆・浜之上幸協力, 東京:白水社.
- 北原保雄編(2003)「付録 品詞解説」, 『明鏡国語辞典 携帯版』, 東京:大修館書店.
- 北村唯司(2007)「造語論からの接近」, 野間秀樹編著(2007)所収.
- 木部暢子(2007)「調査方法を選ぶ」, 小林隆・篠崎晃一編(2007)所収.
- 金珍娥(2005)『NHK テレビ 안녕하세요! ハングル講座』6月号, 野間秀樹監修, 東京:日本放送出版協会.
- 金珍娥(2006)『日本語と韓国語の談話における文末の構造』, 東京外国語大学大学院博士学位論文.
- 木村恵介(2007)『中国語における動補型複合動詞』, 千葉大学大学院博士学位論文.
- 窪菌晴夫(1995)『語形成と音韻構造』, 東京:くろしお出版.
- 窪菌晴夫(2006)『アクセントの法則』, 東京:岩波書店.
- 河野六郎(1955)「朝鮮語」, 服部四郎・市河三喜編『世界言語概説 下巻』, 東京:研究社.
- 【河野六郎(1979)に再録されている】
- 河野六郎(1971)「朝鮮語の膠着性に就いて」, 東京教育大学言語学研究会編『言語学論叢』11, 東京:東京教育大学言語学研究会. 【河野六郎(1979)に再録されている】
- 河野六郎(1979)『河野六郎著作集 1』, 東京:平凡社.
- 後藤祐司(2013)「丁寧化マーカー‘-yo’とn挿入現象に見られる方言差」, 『ありあけ 熊本大学言語学論集』12, 熊本:熊本大学文学部言語学研究室.

- 小林隆・篠崎晃一編(2007)『ガイドブック方言調査』, 東京:ひつじ書房.
- 近藤野里(2010)『フランス語話し言葉におけるリエゾン —Aix-en-Provence コーパスを用いた  
統語・音韻分析』, 東京外国語大学大学院修士論文.
- 斎賀秀夫(1997)「語構成の特質」, 斎藤倫明・石井正彦編(1997)所収.
- 斎藤倫明・石井正彦編(1997)『語構成』, 東京:ひつじ書房.
- サピア, エドワード(1998)『言語 ことばの研究序説』, 安藤貞雄訳, 東京:岩波書店. 【原著は  
1921年刊行】
- 品川大輔(2012)「日本語動詞構造の形態類型論的位置づけ」, 丹羽一彌編著『日本語はどの  
ような膠着語か 用言複合体の研究』, 東京:笠間書院.
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』, 東京:むぎ書房.
- 高山倫明(2012)『日本語音韻史の研究』, 東京:ひつじ書房.
- 趙義成・呉文淑(2004)「朝鮮語」, 『言語情報学研究報告 4 通言語音声研究 音声概説・韻律  
分析』, 東京:東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀 COE プログラム「言語運  
用を基盤とする言語情報学拠点」.
- 塚本秀樹(1997)「語彙的な語形成と統語的な語形成 —日本語と朝鮮語の対照研究—」, 国  
立国語研究所『日本語と外国語との対照研究IV 日本語と朝鮮語(下)』, 東京:くろしお  
出版.
- 辻野裕紀(2010)「韓国語大邱方言における名詞のアクセントと分節音の関係」, 『朝鮮語研究』  
4, 大阪:朝鮮語研究会.
- 辻野裕紀(2011)「現代朝鮮語の〈n 挿入〉をめぐって —朝鮮語教育のために—」, 外国語教育  
学会第 15 回大会発表要旨(2011年 11月 12日, 於東京学芸大学).
- 辻野裕紀(2012)「現代朝鮮語の〈n 挿入〉をめぐって —形態論的条件と語種論的条件を中心  
に—」, 『外国語教育研究』15, 東京:外国語教育学会.
- 辻野裕紀(2013)「言語形式の自立性と音韻現象 —現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として—」,  
『朝鮮学報』229, 天理:朝鮮学会.
- 辻野裕紀(2014)「現代朝鮮語の〈n 挿入〉に関する一考察 —発生論と機能論—」, 『韓国朝鮮  
文化研究』13, 東京:東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』, 東京:くろしお出版.
- 時枝誠記(2007)『国語学原論(上)』, 東京:岩波書店. 【底本は, 時枝誠記(1941)『国語学原  
論』, 東京:岩波書店.】
- 中島仁(2008)「近現代韓国語辞書史」, 野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第4巻』, 東京:く  
ろしお出版.
- 新倉俊一・朝比奈誼・稲生永・井村順一・富永明夫・宮原信・山本顕一(1996)『改訂版 フラン  
ス語ハンドブック』, 東京:白水社.
- 仁田義雄(1993)「現代語の文法・文法論」, 工藤浩他著『日本語要説』, 東京:ひつじ書房.
- 野間秀樹(1988)『길 朝鮮語への道』, 東京:有明学術出版社.



会.

湯川恭敏(1971)『言語学の基本問題』, 東京:大修館書店.

湯川恭敏(1999)『言語学』, 東京:ひつじ書房.

油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎(1993)『朝鮮語辞典』, 東京:小学館.

(3) 英語文献

Ahn, Sang-Cheol(1985) *The interplay of phonology and morphology in Korean*, Doctoral dissertation, University of Illinois at Urbana-champaign.

Chung, Kook[정국](1980) *Neutralization in Korean :A Functional View*, Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.

Kim, Chin-Wu(1970) “Boundary phenomena in Korean”, *Papers in Linguistics*, 2-1.

Kim-Renaud, Young-Key[김영기](1991) *Korean Consonantal Phonology*, 서울:한신문화사.

Lee, Chungmin(1972) “Boundary phenomena in Korean revisited”, *Papers in Linguistics*, 5-3.

Lee, Keedong[이기동](1993) *A Korean Grammar :on Semantic-Pragmatic Principles*, 서울:한국문화사.

Lee, Yongsung, and Lee, Minkyung(2006) “n-insertion as y-devocalization in Korean”, 『언어』 *Korean journal of linguistics*, 31-3, 서울:한국언어학회.

Sohn, Ho-min(1994) *Korean*, London&New York:Routledge.

## 論文の内容の要旨

現代朝鮮語において、終声(音節末子音/coda;final)を持つ音節、すなわち閉音節(closed syllable)に、母音(半母音を含む)で始まる音節が続くとき、当該の終声は後続する音節の初声(音節頭子音/onset;initial)として実現する。つまり、朝鮮語において、(C)VC+V(C)という音節連続が生じると、休止(pause)を入れない限り、(C)VC\$V(C)と発音されることはなく、必ず(C)V\$CV(C)と発音される(\$は音節境界)。これを〈終声の初声化〉(initialization of finals)と呼ぶ。

一方、このような音韻論的環境のうち、後続音節が/i/や/y/で始まる場合((C)VC+i(C), (C)VC+yV(C))には、後続音節の初声の位置に/n/が挿入され、終声の初声化が阻止されることがある。これを〈n 挿入〉(ㄴ 삽입/ n-insertion; insertion of n)と呼ぶ。

本稿は、現代朝鮮語のこうした〈n 挿入〉をめぐる諸問題について様々な視角から論ずるものである。

以下、本稿の梗概を述べる。

まず、第1章では、本稿の主題を提示し、以下の行論について素描した。

第2章では、〈n 挿入〉がいかなる現象かについて、〈終声の初声化〉と対峙させつつ、具体例を挙げながら論じた(2.1.)。また、〈n 挿入〉をめぐる南北の表記法についても確認した(2.2.)。

第3章では、〈n 挿入〉に関する先行研究を通観し、問題点を批判的に論いつつ、併せて私見を述べた。

3.1.では、〈n 挿入〉が本当に「挿入」なのかという問題について、/n/の「脱落」と見做す見解もあることに触れつつ考察し、〈n 挿入〉が、後行要素の頭音として本来/n/を持っていなかった語や外来語、句でも生じる点、また、〈n 挿入〉には義務的なもののみならず、選択的なものも多くあることなどから、「脱落」ではなく「挿入」と見るのが妥当であることを述べた。

3.2.では、〈n 挿入〉が共時的に生産的な現象かという問題について、〈n 挿入〉に生産性を認めない論考があることを述べ、検討を行なった。そして、〈n 挿入〉が句や外来語でも起きることを根拠に、〈n 挿入〉の共時的生産性を否定するのは穏当ではないとした。

3.3.では、〈n 挿入〉がいかなる条件で起きるかという問題について、〈形態論的条件〉(3.3.1.)と〈語種論的条件〉(3.3.2.)の2つに分けて論じた。

まず、形態論的条件については、〈n 挿入〉が生じるためには「後行要素が自立形態素でなければならない」とする見解と、それを否定する見解の双方が存在することに触れ、また、後行要素が自立形態素であっても〈n 挿入〉が起きない語例が少なからず存在することを具体例を以て示し、諸研究の謂う「形態論的条件」とは厳密には「形態論的必要条件」と称すべきものであることを指摘した。

語種論的条件については、先行研究で指摘されている固有語と漢字語の振る舞いの差異(漢字語では後行要素の頭音が/i/の場合には〈n 挿入〉が起きないなど)について、具体的な

言語事実を挙げつつ、検証した。

3.4.では、〈n 挿入〉がなぜ起きるのかという〈契機論〉をめぐる既存の研究を〈音論的な契機〉(3.4.1.)と〈形態論的な契機〉(3.4.2.)に分けて概観した。

3.5.では、〈n 挿入〉がいかにして生じるようになったかという、通時的な〈発生論〉についての従前の研覈について略述した。

3.6.では、〈n 挿入〉に関する既存の実態調査と社会言語学的考察について整理し、その問題点を剔抉した。

3.7.では、〈n 挿入〉と사이시옷(間のs)の挿入の関係をめぐって、先行研究では両者を同一のものとする立場と異なるものとする立場があることを指摘した。そして、両者は抑々挿入される環境が異なること、相互排他的な関係にはないこと、通時的な発生が異なることを根拠に、〈n 挿入〉と사이시옷(間のs)の挿入は別個の現象であることを述べた。

第4章では、〈n 挿入〉の形態論的条件について仔細に論じた。〈n 挿入〉が生じるためには「後行要素が自立形態素でなければならない」という形態論的条件の反例となる「後行要素が補助詞彙の場合」、「後行要素が漢字語接尾辞の場合」等について、〈形態素の自立性〉とは何かという、言語学にとって極めて基本的かつ重要な問題を検討しつつ詳論した。前者については、服部四郎(1950/1960)の〈附属語〉、〈附属形式〉という概念を援用しつつ、〈結合要素の非選択性〉、〈分離性〉、〈交換可能性〉という、形態素の自立性に関するメルクマールに照らすことで、補助詞彙がいわゆる拘束形式の中では自立性が相対的に高いことを闡明した。後者については、漢字語接尾辞を形態論および意味論的な視座から照射し、漢字語接尾辞は固有語接尾辞などと大きく異なり、形態論的にも意味論的にも自立性が高いことを指摘した。こうした事実は、とりもなおさず、〈n 挿入〉の形態論的条件として、後行要素の自立性に対する着目が正しいことを意味しており、「後行要素が自立形態素でなければならない」という形態論的条件が穏当であることを立証し得た。

第5章では、〈n 挿入〉がなぜ起きるかという問題を、〈通時的側面〉と〈共時的側面〉、すなわち〈発生論〉と〈機能論〉の双方から論じた。

まず、〈発生論〉については、고광모(1991,1992)の説に基づき、〈n 挿入〉の起源を18世紀後半の、語頭における/i/,/y/の直前の/n/の脱落に求めた。そして爾来、〈類推〉(analogy)によって、合成語における子音の後という環境で、元来/n/がなかった語にまで/n/が挿入されるようになり、それに伴って、〈再語彙化〉(relexicalization)が進行した。この再語彙化によって、基底形から/n/がなくなり、/n/を含む形は「挿入規則」によって派生されることとなる。これが音韻規則としての〈n 挿入〉の成立である。

そして、この成立過程は、音声学的蓋然性に支えられている。後行要素が自立形態素の場合のみに〈n 挿入〉が起きうること、漢字語において後行要素の頭音が/i/で始まる場合には〈n 挿入〉がほとんど起きないことも、この発生論的視座から説明可能である。

〈機能論〉については、〈n 挿入〉を〈終声の初声化〉と対峙させて考えることで、その機能が〈形態素境界の表示〉にあることを明らかにした。また、〈n 挿入〉の機能的剰余性の問題につ

いても言及した。

第6章では、現代ソウル方言における〈n挿入〉の実態調査の結果記述およびその分析を行った。就中、若年層(20代)のソウル方言話者33名をインフォーマントとして調査を行ない、その結果を詳細に記述、分析した。調査語句全1025個を「固有語」(6.1.)、「漢字語」(6.2.)、「外来語」(6.3.)、「混種語」(6.4.)、「句」(6.5.)の5種に分けて各々を論じ、〈n挿入〉の実現如何には、総じて後行要素の頭音が最も大きく関わっていること、また他にも、後行要素の長さ、先行要素の末音、なじみ度、語構造、後行要素の第1音節の音節構造、語句の長さ、発話速度など、多種多様な要因が抗衡しつつ、重層的に関与していることを明らかにした。〈n挿入〉のかかる実現様相はいわゆる規範と大きく乖離したものである。そして、こうした調査資料とその分析結果は、非母語話者に対する朝鮮語教育にも向後直接的に裨益しうることは贅言を要しない。

第7章では、本稿で述べたところを要約し、総括した。

以上、本稿で論じてきた〈n挿入〉をめぐる問いは、換言するならば、〈形態素〉と〈形態素〉が接合するとき一体何が起きるかという、いわば〈形態素接合論〉的な問いであったと言ってもよい。朝鮮語にはこのような、〈形〉と〈形〉が接合する際に生じる〈音韻論的現象〉ないし〈形態音韻論的現象〉が数多存在する。本稿の〈n挿入〉攷は、朝鮮語のそうした厖大な目眩く音韻システムの一端を描き出さんとしたものである。